



ネットラセ妻

～他の男に抱かれて欲しいんだ～

基本CG13枚+α
本編たっぷり100枚収録!

「朝だよー。靖くん。朝ー！ちゃんと起きないと会社遅刻しちゃうよ？」

するとそこで、唇にやわらかい感触。真由美のキスだった。

「よし、っと。朝ごはんの準備してあるからね」

毎朝恒例の目覚めのキス。
結婚してから今まで、ほぼ毎朝している夫婦のスキンシップだ。



性格が良くて美人で、旦那一筋。

こんな完璧な妻、なかなかいるものではない。

これほどの女性を伴侶に出来たことは、何事にも代えがたい幸運であった。

でも……

唯一。他の男を知らない……その点だけが、俺にとっては不満だった。

「はあっ、んぐっ、あんっ……
ひっっ、ふあっ……動くんぞ……」

「あああっはあああっ……
あっ、はひっ、あんっ……
あっ、あああっ……」

んい
はあ

……真由美はセックスが
好きな方だと思う。

週に何度もするくらいなのだから
それは間違いない。

「あ……ああ……っ……
んっ、くううっ、うう、あっうう、
うんっ、ああっ、うん……
気持ちいいっ……あ、あっ……」

……でも、俺しか知らない。

セックスが好きなのに、男は俺しか知らないのだ。

んい
はあ





「あああつ、いやあつ
ああ……はあ……
んんっ……はあああつ」

……艶めかしい妻の喘ぎ声。

この声を聞いたことがあるのは
俺しかいなさる。

はあ

はあ

はあ

「あああつ……んんっ……
はあああつ、あああつ……ああ……
あつ、あああつ、あつ……」

もし、これが俺じゃなく、他の男だったら。

他の男の上で腰を振っていたとしても、
同じように喘ぐのだろうか。

はあ

はあ

はあ

はあ



「はあっ、あんっ……
あっ、はあっ、はあっ、
変に……なりそうっ……
はっ、はっ、んっ、あ、あっっ！」

はあ

はあ

んっ

んっ

「んっ……くあああっ……
んっ、あっ、あんっ、いやっ……
そ、そんな気持ちいいところ
ばかりっ……ああっ、
はっ、はんっ、んんっ！」

全てを曝け出した自分の姿を、
他の男に捧げるのだろうか。

「くっ……うあああっ……っ
凄、あ、あ、あ、あ、あ、あ、
ああっ、はあああ、あ、あ、
靖くん、すっごく硬いっ……」

「真由美の……」

ズクッ
ズクッ
ズクッ

ズクッ
ズクッ
ズクッ

「うあ……あつ、んっ、んんっ……
だめっ、ふあ……っ、くふっ、
あつあつ……んっ！
あんっ……あつ、ああつ、ああ……」

……俺のペ○スは、
ガッチガチに固くなってるだ。

まるで10代の頃のような、
はぢぎれんばかりの硬さで。

「んあつ、あはあつ、あああつ、
あああつ、ああつ、あつ、ひああつ！
はっ、はっ……あああつ、
あああつ、あああつ！」

真由美が蕩けた顔で俺の事を見つめてる。

「ああつ、あつ、はあつ、
靖くん、わ、私っ、イ、イキそうっ……」



「SSSSSSSSSS」
俺は真由美の腰をつかむと、
一緒に絶頂に達するべく、
下から突き上げた。

「んはあつ、はっ、んっ、
ふあつ……あ、ああつ……ああつ、
んっ……あつ……ああつ！
ああああんっ……ふあつ……」

俺以外の男に突かれても、
こないやらしい顔を
するのだろうか。

「あふああつ……もつとっ、
はっ、はっ、あつ、はあつ、あああ、
つあああ……ああつ……
あ、や、はげしっ……」

真由美が他の男としていると
脳内補完することで、俺のペ●スは
中折れすることなく常にギンギンだった。

行為の後、俺は何気なさを装いつつ、真由美に浮気願望があるかどうか探りを入れた。

「真由美は俺としか付き合ったことないけど……他の男とも付き合ってみたかったな、とか……」

「どういう感じなのか知ってたかな、とか……そういうのあるのか？」

「ん……結構きわどいところ聞けてくるね！」

「……正直に言う……まあ、あるよ？」

「靖くんは……付き合ったことあったんだよね」



「まあ……そんなに長く付き合ってたわけじゃないけどな」

「セックスに関しても思う？ 他の男とも経験してみたかった、とか」

「ま……ま……まあ、あるよ？ それは……うん」

「でもね！ そういうの、誰でも少なからずあると思うよ！私だけじゃないと思うよ！」

「わかってるって。大なり小なり誰でも持つてると思うよ、そういうの」

「じゃあ、次は靖くんの番。
ほら白状なさい。私はちゃんと話したんだから、靖くんも」

「わかった。じゃあ……言うけどさ……変な勘違いはしなびるんぐれよ」

真由美に話をさせた以上、俺がだんまりとらうわけには行かないぞ。

「俺は真由美の事本当に愛してるし、

これからもそれは変わらないつもりだ。
それを踏まえた上で聞いてくれるか？」

「うん、もちろん。何？」

「俺は、真由美が他の男とイチヤイチャしているのが、好きみたいなんだ」

「……………えっ？」



寝取られ性癖がある俺と、他の男ともセックスをしてみたいという願望がある真由美。

俺は浮気願望を持ちつつも躊躇いを見せる真由美に、彼女がセックスをしてみたいと望む相手に双方合意の上で彼女を貸し出すという提案をした。

「……で、しんかい新開さんはなんて？」

「うん……OKって言ってただけど……あのね。出張の日あるでしょ？ あの日だったらいいよって……」

「え……出張の日って、確か……」

俺と真由美が結婚式で夫婦の誓いを立てた日。結婚記念日だ。

「……さよ。新開さんにはOKって伝えた」

「わかった」

これでもう戻りてきなぞ。



新開さんが入ったレストランで、私は少な目のワインを3杯飲んだ。
そして、めっちゃくちゃ酔った。

「もしやめたくなったら、遠慮なく言っていいからさよ。
当然の事だけど、無理やりするつもりはなからから」

「……大丈夫です。心の準備は……できてますから」

そして、部屋に着くと……

「あっ……や……新開さんどこ触ってるんですか」

「俺も、それなりに酔ってるからね」

んんん

あはっ



私が抵抗しなさいのを知らぬまま、
新開さんの手が私の体を這いつくさん。

「暑いわ。もうごらんよ」

「あつ、しつぱはっ……
ダメですっ……
手入れないでっ……」

「こんなに暑くなっているのに、
本当にダメなの？」

「あああ……はあっ……
はあっ……はあっ……」

……でも、それでよかった。
これは私の妄想の展開、そのものだった。

あつあつ

あつあつ

はあ

はあ



「結構派手めのつけてるんだね」

「はあ……っ……あぁっ……や、
だめ、見ちゃ……あっ……あふあぁっ……！」

「綺麗だね、高坂君。
好きだよ、高坂君のおっぱい」

あぁっ

あぁっ

あぁっ

新開さんの手が、
ブラジャーの中に
もぐりこんできた。

「はぁっ！ あ、あ、あ、あぁっ……
そんな、乳首つまみながら、
変な事、いわないでくださいよ……
んっ、あっあぁっ……」





「ほっ、ほあっ、あああっ、
はひっ、はひっ……あんっ……
やっ、だめ、だめえっ……！」

「下着、濡れているね。
それもかなり広範囲だ」

「食事していた時から
なんだろう？ 本当は」

……見透かされてんだ。

んっ
んっ

はあ

はあ

んっ
んっ

んっ
んっ

「んっ……は、
はずかしいですっ……！」
あ、あ、あ、あ、あ、あ、
はっ、ふっ……あああああっ！」
「そろそろ、これも取っちゃおうか」



「乳首、すごいね。すごく勃つてる」

「どうしてそう言う
恥ずかしいことばかりっ……!!
あああっ……!!」

「じゃあ、今から高坂君の乳首、
両方とも摘むよ。いいね?」

「だめ、それは……っ……!!」

「はぁ、はぁ! ああっ、んっ、んんっ、
あっんっ、あっ、あああああっ!!」

「おっと。大丈夫?」

「じゃあ、今度はここの準備をしようか」

はぁ

はぁ

セクッ

セクッ



「ああっ、ああうっ、あああっ、
ああ……あああっ……
あっ、あっ、んんっ！」

「まゆちゃん、そろそろ顔をすするんだね」

「あ、あ、んっ……あっ……
はあっ……ああうっ……んんっ……
新開さん、だめ、だめっ……
ああっ……はあっ……」

あ、あ、んっ……あっ……
はあっ……ああうっ……んんっ……
ああっ……はあっ……

はあ

はあ

「呼び捨てでいいよ。
俺の事は、悟ごで。
ほら。呼んでよ。俺の名前」

「……悟……ご……んんっ……」

「ほら………言っでっらん。
どうしてほしらいんだい、これから？」

「あああッ……んんっ……
あっ……くっくうんんあああああッ!!」

……ぬるっと、奥まで一気に
大きなおち●ちんが
私の中に入り込んできた。

「すごく濡れてたから奥まで
一気に入っちゃったけど……
大丈夫?」

「あっ、ああっ……
大丈夫じゃ、ないですっ……
だ、だめっ……ああ、あ、
あ、あ、だめ、だめっ……!」

入れられたばかりなのに、私、
もうっ……イキそうになってるら……

「ツツツツツツ」



……私はちょっとだけ迷った後、
一言だけ返してマナーモードに設定した。

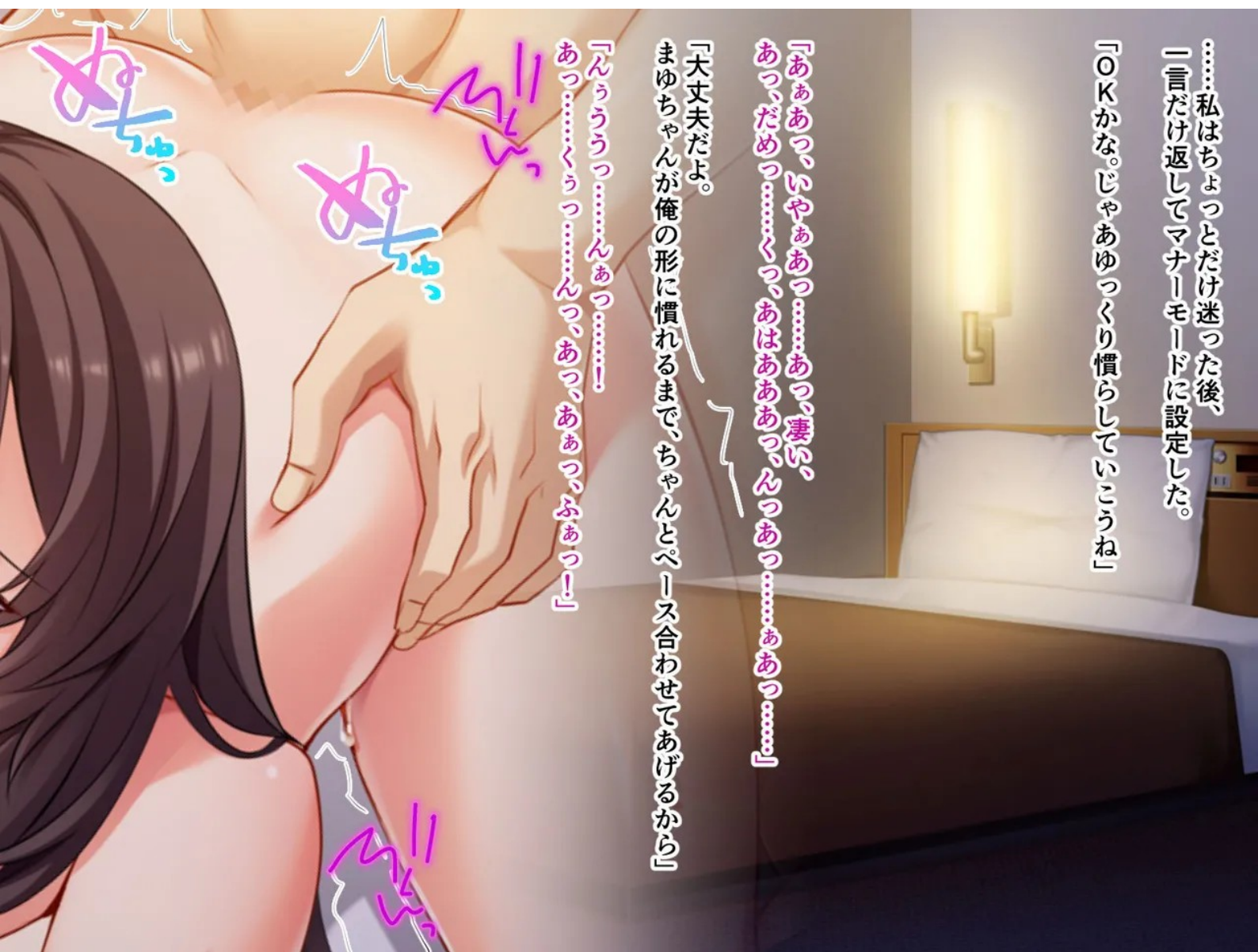
「OKかな。じゃあゆっくり慣らしていこうね」

「あああつ、いやあああつ……あつ、凄く、
あつ、だめつ……くっつ、あはあああつ、んっあつ……ああつ……」

「大丈夫だよ。」

「まゆちゃんが俺の形に慣れるまで、ちゃんとペース合わせてあげるから」

「んっううっ……んあつ……！
あつ……くっつ……んっ、あつ、ああつ、ふあつー！」





「ああっ、セックス、してるっ……う、浮気、しちゃってるっ、私っ……ああっ……」

「気持ちいい？」

「気持ちいいっ、気持ちいいですっ……っっ！……っっ！」

「敏感だね。本当に。旦那さんとするときもそうなの？」

はあ
んっ

はあ

んっ

「あ、あ、ああ、あっ、ちがうっ……こんな、なったことないっ……ああ、あ、あ……！」

「じゃあ、旦那さんとは違ってっっっ！」



「はあっ、あああ、つあああ……
ああっ……ああっ……だめ、だめええっ……！」

新開さんの動きは、
ますます大きくなっていく。

「うっっ、ああ……あああっ……
ああっ、んっ、んあっ、ああ、いい！
ああっ、んっ……ハア、ああっ、んっ、
はああっ……はあっ……んんっ……！」

犯●れてる。

後ろから腰を打ち付けられて……
犯●れてる、私っ……！」

「ほら、教えて？」

旦那さんとするのと、どっちがらうのが『



「あ、あぁっ、い、いやっ……
激しくしないでっ、そんなっ、あ、あぁっ！
いや、いやっ……靖くんと、
できなくなっちゃうっ……あ、あぁっ！」

はあ

はあ

アハハ

アハハ

「まだ入れたばかりだよ。
真由美」

「気持ちいいからっ……
あ、あぁっ、あああぁっ！
ダメになっっちゃういそう
だからっ……！
あああぁぁぁっ！」

「ダメなの？ どうして？」

「はぁっ、あああぁっ、あ、
ひうっ、だめ、言えないっ……！
そんなにえっちなこと
しないでっ……っ……っ……！」

アハハ
アハハ

「はっ、あっ……くっ……
はあああっ……ダメ、だめです、
キスは本当にっ……だめ、だめっ……！
んんんんんっ……！！
んっ……っ……っ……っ……っ……」

「ダメって感じじゃないよ、真由美」

「チュムッ……はあん……
チュルッ……んんっ……んっ、
ハア……んっ、っ……んっ……」

「どっちがいい？
セックスしながら
感じてる顔を見られるのと、
深いキスをしながらするのと」

「じ、じゃあ……
キス……しながらがいい」

「オッケー」



「は————っ
は————っ……はあっ……
は————っ……」

「はあっ……はあっ……はあっ……」

……そして私たちは。

セー
アッ

セー
アッ

アッ

ド
ド
ド
ド

アッ

「んん……っ……んんっ……
んっ、むっ、ぐううっ、うっ……
ああ……チュルッ……」

まるで恋人たちのように。

余韻を愉しむようなキスを味わった……

……視界の隅に、時計が見えた。

日付が5月の間にか変わっていた。

あれ……今日って確か……
結婚記念日じゃなかったっけ……

「うふっ、むっ、んっ、んっ、んっ……
うふっ、うふっ……っ、んっ、んっ、んっ、
んっ……うっ、んっ、んっ……」

やめなぐちやっけなのだ。

なのに……

「真由美ってセックス好きなんだね」



「あつ……あふあつ……
悟、さんっ、ああつ……ああつ、ご、ゴム、
ついてましたっけっ……んっ……あつ……
はああつ……んっ……あ、ああつ……！」

「大丈夫、イキそうになったら
ちゃんと着けるから。
妊娠させるようなことはしないよ」

……なら大丈夫なのかな。

新開さんがそう言うなら
大丈夫なんだと思う。

「ああつ……いや……あ、あ、あ、あつ
深いのだめっ、はっ、
はあんっ……ああつ、ああつ！」

「……ほら。
子宮に当たってるのわかるでしょ」



「あつ、あつ……
だめ、と、とまらない、あつ、
き、気持ちいいの止まらないっ……
あ、あつっ……あああつ……！」

「そろそろ
イキそうになってきたけど、
どうしようか？」

「このまま生で外に出すか、
ゴム着けて中で一緒にイクか。
どっちがいい？」

「はぁ
はぁ」

「はぁ
はぁ」

「は、はっ、はぁーっ……はぁーっ……！」

そんなの、考えるまでもなく決まってる。





「はっ、はあっ...中で、
一緒がいいですっ...はあ、はあっ...」
「わかったよ。ちょっと待ってくれよ」

.....今、もし新開さんがその気になって。
生で中に出そうとしたら、私はどうしただろう。

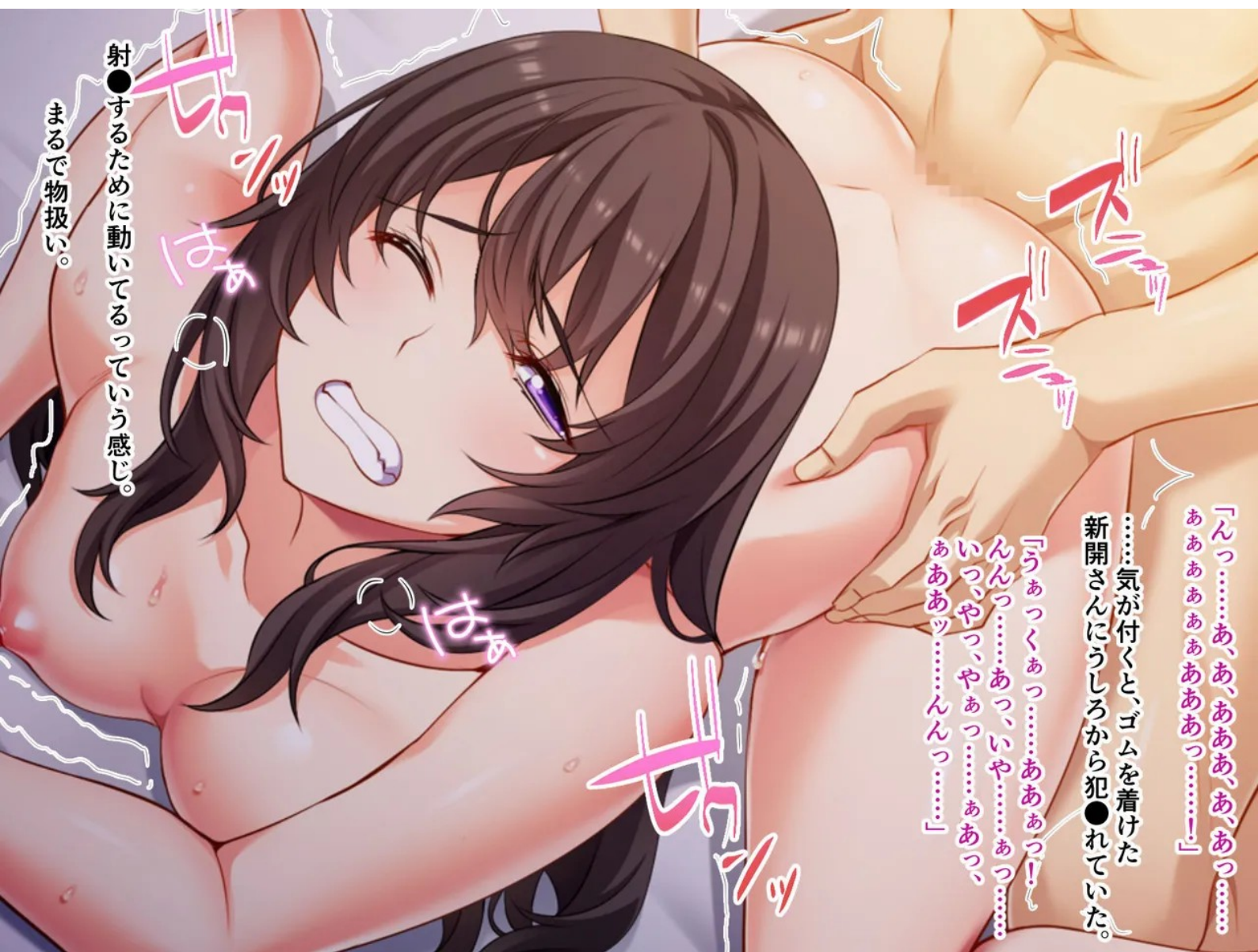
「入れるよ」

「んっ……あ、あ、あああ、あ、あっ……
あああああああ……！」

……気が付くと、ゴムを着けた
新聞さんにうしろから犯●られていた。

「うあっくあっ……あああっ！
んんっ……あっ、いや……あっ……
いつ、やつ、やあっ……ああっ、
あああッ……んんっ……」

射●するために動いてるっていう感じ。
まるで物扱い。





「凄いいあつ、激しっ、あああんっ！
ああっ……あああああ……
あっあひいいっ！」

……でも、それが。

その乱暴な扱いが、すごく興奮する。
靖くんは絶対してくれない
セックスだから……！

「はあっ、あああっ、あああ……
ああっ……あああ……
くっ、んっ！
はああっ……あ……ああっ……んあっ！」

セッ
セッ
セッ

ブッ
ブッ
ブッ

セッ
セッ
セッ

セッ
セッ
セッ



「イクよ、真由美……！」

「来るっ……あああっ……きちやうっ……
凄いのっ……き、きちやうっ……！！
ああっ、んっ、んっ、んはあっ！」

「きてっ……来てえっ……ふあっ、
ふああっ……あっ、んんっ！
くうっ、あああああああっ……！」

ドドド

サッパッパ

セッパッパ

「……！！」

「きてええええええええええ……！！」

はぁ〜



「っっっ！んはあっ！
はあっ！はあっ！はあっ……！」

「はあ……はあ……っ
っ……はあ……はあ……！」

「じゃあ、今夜はお疲れ様」

「念のため明日起こしに来るよ。じゃ、お休み」

靖くんからは、沢山のメールが来ていた。

なんだかそのメールを見て、すごく申し訳ない気持ちになってしまった。

「……………」

日付を跨りでも、新聞さんとセックスを続けてしまったことは、
隠しておいた方がらびらよね……そう思った。

出張から帰ってきた真由美と二人で寝室に入ったのは夜の7時半。

小学生……いや、幼稚園児ですら、
こんな時間に床につく子はいないだろう。

でも、待ちきれなかったのだ。

「んふっ……あっ……かたっ……
靖くん、ずっと我慢してたんだね……ん」

「いいんだよ？ イキたくなったら、
いつでもイっていいからね？ ただ……」

「……新聞さんは、こんなに早くイったりしなかったけどね？」

「まだ、大丈夫っ……」

「ふふっ……そうだね。
ご褒美あげるね……チュッ……んうっ……っ」

七つゆっ



「晩御飯でお酒飲んで……
そのあとはふらふらになったから
新開さんに抱かれて、
そのまま……お持ち帰り」

「……抱き合って、
いろんなところ触られた」

「感じたのか……？」

「アト」

「うん。感じたよ。
おっぱいのさわやかたも、
あそこの愛撫も……
靖くんとは違ってた。
浮気してるんだなって思った」

「で……いったのか、結局……」

「……そうだね。イカされたよ？
新開さんのおち●ちん、入れられて……
すぐイっちゃった……」



「そんなに……入れられてイクくらい、我慢させられていたのか」

「それもあるけど……それだけじゃないんだよ？……新開さんのおち●ちんね。すごく大きかったの」

「あまりにも大きかったから、ゆっくり動いてっってお願ひしたの。やばいなーこれっと思っで。でもね……ゆっくりでも全然我慢できなくて……」

「そんなに……大きかったのか？」

「うん……大きすぎるっで程ではないけど……他の男の人としたの、初めてだったし。靖くんのはカタチも全然違ったから……」

「……だから、まずは新開さんのおち●ちんが馴染むようにつて……ゆっくり、ゆっくり、時間をかけてえっちしたの」



「その後は……」

「いっぱいしたよ。
後ろからすぐ沢山突かれた。
奥まで何度も突かれてイカされて……
子宮を突かれるのが弱いんだねって
言われたんだ……」

「……靖くんは知ってるもんね、
私が奥までおち●ちん入れられたら、
すぐに気持ちよくなっちゃうの」

はぁ

はぁ

「新開さんにもバレバレだった。
それからはもう激しくて……
ずっと気持ちいい、気持ちいいって
言ってた気がする」

「あ、あっ……だめだっ……
あ、あっ……」



「……本当に興奮しているんだね。私が浮気してきたこと」

「……その後はね、正常位でエッチしたの」

「新開さんの顔すごく近くて……私の感じてる顔見るんだって言って、じーっと見つめられてた……」

はぁ

はぁ

はぁ

「……恥ずかしくて、見ないでくださいって言うつてもやめてくれなかった」

「だからね……どうしたと思う……？」





「……キスしたの」

ちゃっ

「イってるところ、
見られたくなくて。
イキそうになるたびに、
新開さんとキスしたの」

「……イク時に……
真由美の方から、キスをしたのか」

びよ
びよ

「……ん」

「それで……終わったのか」

「……んー一回目はね」

「ん……」

ん

ん

ん

「もう、理性もなにも無いよね。
私……新開さんに抱き着いて……
何度も言った。
気持ちいいです、
すごくいいです、って……」

「……今までしたセックスの中で……
どれくらいよかったんだ」

「……いちばん、だと思うよ?」



はぁ

はぁ

どっ

]

「あっ……またびくってした」

「……う、ごめん。」

興奮しすぎて、本気でやばい」

セックス

グッ

どっ

セックス

「……すっきりした？」

「ん……あああ」

「あのね……勘違いしないでね。

……本気で言ってたんじゃないからね」

「……靖くんが悦ぶかなと思って、言ったただけだからね」

「ん、そっだよな……はは、ははは……」



「不思議だよな。

浮気をしてきたはずなのに、する前よりも、靖くんが愛して」

「……俺もだよ」

「よかった」

.....やっぱり今までとは、やはりちよつと変わった気がする。

したことは、真由美の浮気だと知らぬのに、なのに怒る気には全くならずむしろ愛しい。

真由美からも、普段以上の想いを感じる。

真由美を貸し出して本当に良かったと、俺は思うのだった。

「新開さんのセックスで散々乱れてきたんだろ」

「い、いや……言わないで……あ、あつ……」

「あ、あ！ う、うそっ……！ おつきいっ……！

あ、あ、ああつ！ んっ……ハア、ああつ！

ああつ……あつ……あつ……あつあああつ！」



「っ……ほら、こういうのがいいんだろ。
散々こっやって、激しくされてきたんだろ」

「あっ、あっ、ああああっ！」

「ああっ……ああ……あつ、あつ、あつ！
変に……なるっ……あ、ああっ……！」

「はあっ……あああつ！」

「あつう、だめっ……もうだめっ……
んんあああああつ！」

「あああああああああつ……」

「んんんんっ——っ……
だ……めえっ……ええっ——！」

は……ん……ん……

は……ん……ん……

は……ん……ん……

「はあっ……はあ……はあ……
ああ……はあ……はあ……」



新婚気分な日々は、以前にも増して続いた。

家の中では終始べたべたしていたし、外に出ても、手を繋いで行くことが増えた。

「……いつまでも、こういう気持ち大事にしたいよね」

「そうだな」

そしてしばらくの月日が過ぎた。



「あのね、靖くん。来週の月曜日なんだけど……
また出張に行くことになったんだ」

「そうなのか……ひとりっ」

「ううん、新開さんと一緒。」

「……靖くんが嫌なら、無理言っつて断ることもできるけど……」

「心配は特にしていないけど……新開さんとはあれからどう?
大丈夫なの?」

「んー……最近は結構自然な感じかなあ。
……でも私はちょっと、昔を思い出したりしたかな」

「靖くんと初めてえっちした後さ、恥ずかしいなーって思ってたんだよね」

「新開さんも頭の中ではどう思ってるのかなーって考えると、
はあああ……てなっっちゃうんだよねえ」



「真由美は新開さんの行為を思い返していたりするのか?」

「……それは内緒」

結局真由美は何を思返してらるのか教えてはくれなかった。

……だから考えすぎるみるみるわかる。なぜなの……。

「あ、あ、あはあつ……うん、そうだよ……
新開さんのえっち、
すっごく気持ちよかったよ……
このまま朝までしちゃっても大丈夫で
思うくらい……すごかった……」

……こうして、セックスをする度に
聞いているからだ。

「ねえ、またしてもいい……？
新開さんと浮気してきてもいい……？
ねえ、いいでしょ？」
だつて靖くんのおち●ちんは、
こんなに悦んでるんだもん」

「えっ……そ、そんな……ああつ……
だめだ、それ気持ちよすぎるっ……」

「あああ……すっごく……ねえ、もつと言つて。
気持ちいいつてもつと言つて……
靖くんのえっちな声、もつと聴かせて……」



私

「ああ、気持ちいいよ、真由美……すごい！」

「あ、あ、これ、これ……！わたしも、いきぞうっ……っ……！あ、ああっ……！ああっ、はああっ、ああああっ！」

セクシー

セクシー

「真由美……俺も……」

「あっあっ……イクイクイクイクイクイクイクイクイク……」

ドキュン

私

「……真由美。さっき言ったのって、本当だと思う？」

「……私なの？ またイカされちゃうよ、私っ」

「私、私……まゆみか……そうしたいなら……」

……そうして俺はまた新開さんをお願いする機会を作ってもらった。

「高坂です。お待たせしました」

「ああ、ちよつと待つて。今開ける」

「……じゃ、始めようか」

「はい。ちよつと失礼しますね」

新開さんの前で膝立ちになる。

そして……ズボンのチャックをゆつくり降ろした。

「舐めますね」

カキ...

「んっ、んっ……ちんぽっ、
んん、んっ、ふっんんっ……」

キコ...



「ちゃんと言ってますよ。
んっ……じゅるっ……むぐぐららら……
んっ、ぶっ、んっ、ぶっ、らぶっ、んんっ……」

「俺だったら、愛してる妻が他の男に
フ○ラしているなんて耐えられるわけだね」

それ、普通の感覚だと思っ。
でも、浮気じゃない。

はぁ

はぁ

はぁ
はぁ
はぁ

靖くんができてきてほし
望んだことだから。

「んん、うらっ……チュッ、ハア、
んんっ、ハア……ハア……はぁ……
新聞さん、すっごい固くなってますよ」

「……こんなシチュエーションに、
興奮するなんてどう方がおかしいでしょ」



「別に、そうなりたくて
なったわけじゃないんですけどね」

……これは、半分嘘だった。
この貸出プレイには、
私の欲望も半分入っているのだから。

くっくっく

はま〜…♡
「……………さんさんさん……
……………さんさんさん……」

……でも、それは
新開さんが知る必要のないこと。

実は靖くんにお願ひされる前から、
新開さんに無理やり犯●れる妄想をしました、
なんて絶対言えない。

その後、小休止したあとまた
新開さんのおち○ちんを
大きくしてあげた私は……

「あぁっ、くぅっ……あああっ……あ、はんっ！
あんっ、はぁっ……は、はいつてっ……
きたあぁっ……んんっ……あぁっ……！」

この前のように、後ろから犯●れていた。

「あ……あ、あ、あぁっ……あぁっ……
お、つきっ……すぎですっ……
新開さんっ、ああああぁっ……！」

「新開さん、じゃないでしょ」

「はぁっ、悟さん、ま、前より絶対大きいっ……
す、すごい、深いところまで来てるっ……」

んんっ

んんっ





「子宮までちゃんと届いてる?」

……届いていた。

こんなに大きいおち●ちんなんだから、届かないはずがなかった。

「まゆちゃんがエロいせいで、
こんなにおおきくなつたんだけど。
ぶっちゃけ、仕事でも結構我慢してるんだよね」

「ぞ、そんなの私のせいじゃないでっ……
ふあっ! んんっ……あああっ!
ひっ、くうっ!? あ、あ、あ、あ!」

はぁ

はぁ

はぁ

はぁ
はぁ
はぁ

「……今日が来るの、
ずっと楽しみにしてたよ」

「あつ、あ……う、うんっ……
あつく、ああつ、はあああつ！
うそ、そういう事、言わないでっ……」

「でも、気持ちいいんだろ？
旦那のエッチより」

「あああつ、お、奥つ……
奥、あああああつ！
そ、そんなに押しつけないでっ……
ひうっ、ああん……うああつ……！
あんっ……」

ズクッ
ズクッ

はあ

はあ

「気持ちいい、きもちいいっ……！ あああつ！
だめっ……こんなのっ……またっ、はひっ、
あ……ああ……っ……あつ、あんっ！」



「なんだよ。もうイクの？
奥が弱いんだな、まゆちゃんは」

「そろっ……されたら、
誰だっけ気持ちよくなるに
決まってるじゃないですかっ……！」

「そろっ逆切れ、大好物」

急に新開さんの動きがゆっくりになった。

「あああ……ああっ、だめ……そんなっ……
あ、あっ……うごいてっ……悟さんっ……」





「あぁっ、あつもうだめっ……！
イッちゃう、イッちゃうっ……イッちゃうっ……！
あつ、あつ……！ イッちゃううっ……！」

「……中●出すぞ」

セクシッ
アッ
アッ
アッ

アッ

どぎっとした。

ゴムをつけているのはわかってはいるけど、
まるで中●しするみたいない方だったから。

「あつ、あつ、あああぁあつっ！
あぁっ……ああ……あつ、あつ、あつ！
変に……なるっ……あ、あぁあつ……嬉しいっ……！」

セクシッ

「ち、ちよっとっ……新開さんっ、おつきくしすぎっ……ですよっ……」

「ほら、また呼び方戻ってるよ」

「あんっ、あっ、悟さんっ、どうしてっ……そこっ、だめっ、ひっっ、あっ、あっ、だ、だめ……」

はぁ

はぁ

アッ
アッ

「巨那さん、こんなまゆちゃんの姿見たら腰抜かすだろうなあ」
「靖くんはっ、ただごとっ、喜ぶと思っますっ……
あああ……あああ……
ああっ、ああっ……」



「あああああああああつ……
あああああああああつ」

……だから、気持ちよくなってもいい。

「はあああつ……あああつ……
はあーっ！ はっ、はあつ……！」

それが靖くん望んでいる事
なんだし……

「旦那さんと俺、
どっちのセックスが好き？」

はあ

セックス

はあ
はあ
はあ

セックス

はあ

「そんな意地悪
言わないでくださら……」
……あつ、あつ……！
前に、ちゃんと答えたじゃ
ないですか？……あああつ、
ハアアツ、あつあつはっ、あつー」



「答えてくれないなら、抜いちゃうよ」

「あ、あ、だ、だめっ……どうしてまた
意地悪な事するんですかっ……
…抜かないでくださいっ……」

「じゃ、どっちがいいか
ちゃんと答えて？」

「ああ、ああ、あっ……悟さんの方がっ、
気持ちいいですっ……んっ……
あ、あ、あ、あああっ……」

「さあ、今聞かされたら
気持ちいいからさあやせやせ
『ういっのやあんんんん』
好きさっ『うんんんんんん』
わっうんんんんんん」



「そんなのしらないっ……！
あああつ、うんっ……あつあつあつ！
もっと、もっとしてっ……悟さん、それももっとっ……！」

「えっちが大好きなんだな、まゆちゃんは」

あつあつあつ
あつあつあつ
あつあつあつ

「はあつ、はあつ、悪いですかっ、好きですよ……
でも、そういう意地悪な事を言う人は嫌いです……っ
……あああつ、はああつ、あああつ……！」

「じゃあ、好きになって
もらえるように
頑張るよ」

「だめっ、だめっ、ああ……あああ……
あ……あああつ……ああっん、あ、あ、あ、
あ、んうっ、ひあん、んふっ、あん！」

「っ……そろそろ、俺も限界近いわっ……」

「あああん……ほんとですかっ……？
悟さん、きてっ……
はっ、あっ、あああっ……」

「オッケー、一緒にイこう」

「あああっはあああっ、あっあっあ、
あ、あ、あ、っ……んんんっ……
はあっ……はあっ……」

IP
IP
IP

IP
IP
IP

IP
IP
IP

IP
IP
IP

「……」





「うんっ……いいよ、きてっ……きてっ
あああああっ……来てっ……はあっ……
んっ、あああっ……あああっ……」

「あああっ……くっ、あっあっあっああ……
あああっ……ああっ……
い、くっ……い、くっ……悟さんっ……
わ、私もっ……い、くっ……あああっ……」

「あああああああああああ……っ……っ……」

ジュッ
ジュッ

ジュッ
ジュッ

ジュッ
ジュッ

ジュッ
ジュッ

「は……は……
はあ……はあ……
はあ……はあ……」

「……もう待ちきれないんだね。
どうしようっかなあ。話すの、明日にしようか」

「お、おひ……やめてくれよ。
もう待ちきれないんだよ……変に焦らさないでくれ」

「ふふ……うそうそ。冗談だよ？」

「私もね……靖くんに話したいな……つてずっと思ってたから」

「ぞ、それは……どうして？」

「それはね……靖くんに話したくなるくらい……
すてきなセックスをしてきたからなんだよ？」

はぁ〜……♡

はぁ〜……♡

はぁ〜……♡

はぁ〜……♡



「な、舐めたんだよな、確か……」

「うん、そう。舐めたよ。
新開さんのおち●ちん。
ちゃんご奉仕してきたんだよ」

「知ってる靖くん？
フ●ラってね……好きな人のじゃないと、
上手に出来ないんだよ？」

んんん

んんん

んんん

「え……す、好きって……」

「うん、そう。
好きな人のおち●ちんだから、
上手にしゃぶれるの」

「じゃあ……新開さんのは……
上手にしゃぶれたのか……？」

んんん

「……もちろんだよ。
新開さんのおち●ちん、
ちゃんとイかせてあげたよ。
精●も飲んじやった」

「う、うそだろ……俺とするときば、
飲んだりしないじゃないか」

「ふふっ……そうだったね。
靖くんは、
いつも飲まないもんね、私」

クソ

クソ

「あ、あぁっ……！」

やばい。
イキそうになってしまった。

「あつ、ごめんごめん。
もちろん靖くん愛してる。
でもね……カラダは新開さんの方が
好きになっちゃったみたい」

クソ

ドロォ
クソ
クソ

「だって新開さんセックスは
本当に素敵だから。
何も考えられなくなるくらい
感じちゃうから」

「そんな……何もって、
まさか俺の事も……?」

「そうだよ。靖くんのも
考えられなくなっちゃうの」



「おち●ちん入れられてる時は
新開さんのことだけ。
どうやったらもっと
気持ちよくなれるのかな、とか、
一緒にイキたいな、とか……
そういうことばかり考えてる」

「でもしょうがないよね。
だって……靖くんのおち●ちんよりも、
新開さんのおち●ちんの方が
気持ちいいんだもん」

「……すぐにイっちゃうもんね、靖くんは」



「あ、ああっ……ダメだっ……でるっ……！」

「あーあ……イっちゃった。
もうちよつと我慢してほしかったのにな……！」

びしょ

「そ、そうだ……
ゴム、渡すの忘れてたけど……
大丈夫だったのか？」

「……いれちゃったよ。
生のおち●ちん」

「……!？」

「っていうのはウソ。
ちゃんと新開さんが持ってきてくれたから、
それを使ったよ」

フグググ

セー

ド

びしょ

「あのね……また出張が決まったんだ」

「最近多いな、出張」

「うん……海外出店することになって、それでちょっと忙しくなってきたの。フランスに出店するんだ、うちの会社」

「それで、本社での会議が増えるの」

「なるほどな……今回も」



「……あのさ。お願いがあるんだけど。今度はちょっとステップアップしてほしいな」

「ステップアップって……？」

「……撮りたいだけさー」

「……そんなふうかな。頼むよ、真由美……」

俺の願望がようやく叶う。

どんな顔をして抱かれているのか。

どんな声をあげて抱かれているのか。

どんな風を感じ、どんなふうに求め、どんな風にイクのか。

俺以外の男とセックスをして、楽しんでいる真由美の姿。

その全てを……俺は知りたい。

「はあ……はあっ……」

今真由美がしているという現実よりも、
ついに見ることが出来るその映像が……今の俺の興奮の全てだった。



数日後。

「ただいまー……あれ？」

真由美のメモがUSBメモリと共に置いてある。

『見たらちゃんと消すように！』

あと靖くんもしこしこ動画もちゃんと撮ること！

あと、今日は自分の部屋で一人で寝るので

探さないでください……真由美』



この中に、真由美の浮気セックスが収められてる……

空腹感などどこかへ飛んで行っちゃった。

俺は急ぎ普段着に着替えると、

さっそくそのメモリーをモニターに差し込んだ。

「ひゅっ、はっ、はっ、んっ、ああああっ！ はあっ、はあっ……」

ビデオは挿入されている所から撮影されていた。

こんな顔して、セックスしていたのか、真由美……

「感じてる高坂さんの顔、丸見えだよ」

「あ、ああっ……だ、ためっ……見ないでっ……はあっ、あああっ……」

あんな顔……見た事ない……



「あ、あ、あ、あ、や、だめっ……
あ、あっ……くうっ……はあんっ……
くううっ、はんっ！ はあっ……んんっ……！」

「声、我慢してるんだ？」

きんきん

「はあっ、はあっ、あっ、うっ……
べ、別に、そういうわけじゃっ……うっっ、
ひっ、あうんっ、ああっ……！」

「そうだよね。撮影しているもんね。
普段の高坂君の姿は、さすがに見せられないか」

「はあっ、あああッ……んんっ……！
そんなこと、言わないでくださいっ……！
あんっ、ふあっ、ああっ、だめっ……だめえええっ……！」

んんん
はあ

はあ

んんん



「あっ、ああっ……
あっああっ……あっ……!!
だめ、だめっ……新開さん、
まだゆっくりっ……!!
んああっ……あっあっ
あっあっあっあっ……!!」

「ほら、旦那さん
お願いされてるんだろう?
撮ってくれて」

セクッ

あざん

「もっと顔見せてあげたら?
夫以外の男とセックスを楽しむ表情を」

「ふあっ! やだっ、あっあっ
あっあっあっあっ……!!
んんっ……んはああっ……!!」

「んもは喜んで
腰を振ってSONO」

セクッ

「はあ……っ……ああっ……!!
い、いやっ、変な事、
言わないでっ、くださるー!
んはあっ、ふあっ、ああ……
はあっ、ああっ、ああ……!!」

「いやいや言いながらも、
やめられないんだな」

「だつてっ……だつてえっ……!!
あっ、あっ、あっ! あ、ああっ……
うんんっ……ふっ……あああああっ!
あああっ、いやあっ……!!」

「っ、こんなじゃならぬっ……
靖くん、本当だからっ……
あ、あっ……だからっ……
勘違いしないでっ……
あ、あああああっ……!!」

言い訳しながらも、
真由美は新開さんの
セックスに酔いしれていた。

俺への言い訳を
口にしながらも、
淫らに喘ぎ、
だらしない顔をして、
新開さんの
テクニクで悦んでいた。

そうして映像はいつたん止まり……
再び真由美の中に新聞さんのペ○スが挿入された。

「や、やだっ、こんなくっついた格好っ……
あ……はあっ、こんな……あっ、ああっ……！」

「旦那さんに見られるのは嫌？」

「い、嫌に、決まってるじゃないですか、そんなっ……
っあああっ……あああっ……はああっ……あ……ああっ……んあっ！」

「でも、案外喜んでいるかもよ？」

「ああっ……いや……そんな……はあっ、ああっ……あああああ……！」



「高坂君が感じれば感じるほど、旦那さんは嬉しいんだろう?」

「はあっ、やだっ、ああっ!」

あっああっ!

「あああああんっ……そんなに、深く入れないでっ……ダメッ! ああ……はあ……!」

「……ほら、ちゃんと

教えてあげないとわからないよ」

「あ、あ、ふあ……!」

ご、ごめんっ……

い、今っ、すごく、深く……

入れられてるのっ……

はあっ、はあっ、

おかしくなりそっ……

ああっ! あ、ああっ……

あああっ……はああっ!」

はあ

はあ

んっ

んっ

んっ

真由美がカメラ視線で、
新開さんとのセックスを報告し始めた。

でも……すぐに感じ始めて。



「おかしくなるっっ！
だめっ……もうだめっ……！
イッちゃうッ……だめっ……
私っ……ああっ、ああっ……！」

「い、イク、いくううっ……！
イッちゃう！ んんっ……
んんんんんんんんんんっっ！」

「ほら、ちゃんと見せて。
イッたあとのトロンとした顔」

「……こんな顔するの？ 普段は」

「はあ……は……は……は……
しない……しないですっ……
は……は……はあ……」

新開さんの前では、
いつもそんな顔をしているのか。

俺と言う存在がありながら、
職場の上司でしかない新開さんに
発情しきった顔を見せているのか。

妄想の中の真由美以上に……
浮気中の真由美は淫らだった。

「ああっ……ああっ……
ず、ずるいよっ……」

新開さんっ……

ああっ……ああっ……

あ……ああ……っ！」

はぁ

はぁ

はぁ
はぁ
はぁ

「あああっ……ああっ……さっきからっ、
私の弱いところばかりっ……！
あああっ……ふあっ……んあっ、こんなのおっ、
き、気持ち良くなっちゃうにっ……
きまってるじゃなですかっ！」

[S.S. (Sune)]

「ああっ……ああっ……はいっ……
あああつ……ふあつ……
いいっ、いいですっ……
はあつ、はあつ、あ、いいっ、あつ……
あああつ、いいっ、いいいっ……」

「正直だから、ご褒美ね。
高坂君が一番好きな動きで
イかせてあげる」

「ああっ、イ、イクウツ……
あああああつ、イツちゃうっ——」

真由美、真由美っ……!!



……でも、真由美のセックスはまだ終わらない。

「はっ、はっ、あんっ、あ……
はああっ……はあっ……
んんっ……あっ、あああっ、
ハアアッ、はっ、あああああっ！」

「あっあっあんっ……あ、あああ、ああ、あ、
あああ、も、もうっ……限界っ……
新開さんっ……新開さん……お願いっ……！」

「一緒にイこう、高坂君」

「きてっ……来てえっ……悟さんっ、
ふあっ、ふああっ……あっ、んんっ！
くうっ、ああああああああっ……！」

セックス

セックス

IP

IP

映像はここで終わった。

でも……俺の興奮は収まらなかった。

「……こんな……こんな……
セックスをしてきたのか」

こんなセックスを経験したら……

俺とのセックスなんて

遊びみたいなものじゃないか。

激しく妬ましい。

なのに……再びシークバーを動かして、
新開さんに突かれまくっている真由美を映し出し……

「真由美……」

収まらぬ興奮に突き動かされ、
狂ったように自慰に耽るのだった……

——
続



大人の禁SEXY絵本

©アトリエさくら